

「日本原水爆被害者団体協議会」の ノーベル平和賞受賞は大きな契機

2024年のノーベル平和賞に日本の「日本原水爆被害者団体協議会」が選出されました。

ヒロシマ、ナガサキに投下された原子爆弾、そしてアメリカ合衆国によるビキニ環礁での水爆実験を機に広がった原水爆禁止運動の中で被爆者の全国組織として1956年に長崎で結成されました。

広島と長崎への原爆投下から68年。

国連をはじめ様々な場所において、身をもって経験した原爆の恐ろしさとその後遺症の悲惨さを訴え続けてきたことが認められたのだと思います。

佐藤栄作首相が「非核三原則」でノーベル平和賞を受賞してから50年。

後遺症に苦しみながら、草の根的にその悲惨さと非情さを訴え続けてきたことが、ようやく世界に認められたのです。

核のない平和な世界は、人類にとって共通の願いであるはずです。

世界のために、今後とも活動が続けられ、核の悲惨さを訴え続けていただくことは、とても意義のあることに間違いありません。

米国の大統領であったオバマ氏、そしてバイデン氏は広島を訪れ、原爆資料館で核兵器の恐ろしさを再認識していただいたと思います。

今回の「日本原水爆被害者団体協議会」のノーベル平和賞受賞を機に、核兵器が2度と使用されることがないように、核兵器の廃絶や被爆者の救済を訴え続けていかなくてはならないのです。

ロシアのウクライナ侵攻、イスラエルのガザに対する攻撃、そしてイランの介入など、世界にはまだ悲惨な戦争が終わらないどころか、第3次世界大戦の危惧さえ囁かれる状況が続いています。

いまこそ、「日本原水爆被害者団体協議会」の活動とノーベル平和賞の受賞が、核なき世界、戦争のない世界の実現に繋がっていかれたらと願って止みません。

それは、世界で唯一の被爆国である日本という国において、草の根運動に止まるようなことではないはずです。

今こそ、日本の政治に携わる人々、そしてメディア関係者などが大きな役割と責任を再認識し、核なき平和な世界の実現を目指す必要があります。

平和の大切さ、有難さを、ぜひ再認識し、訴え続けていただきたいと思います。

本誌主幹

大中吉一